



「宮入慶之助を21世紀の若い世代に如何に伝承していくか

—他の記念館の事例を参考に—

名誉館長・理事 太田伸生

1. はじめに

昨年7月に野口英世記念館に若い世代にいろいろ感染症というものに関して、興味を持ってもらおうということで「感染症ミュージアム」というのを開館したんです。その中でウイルス感染症、細菌感染症それから寄生虫感染症について、私も含めて設立に関わった理事が「野口英世記念館報第68号」に書いてありますが、山口理事長からこのレポートとともに「感染症ミュージアム」の紹介も含めて話をしてくださいというお話をいただきました。私は今三重県の鈴鹿というところにある医療系の大学に勤務しております、それでこの若い世代にとってこういった先人の医療功績、これがかみにくい時代になっているなあと常日頃から気になっておりましたので、今日宮入慶之助記念館ということで、宮入慶之助先生についていろんなことをお考えいただいている皆様ですから、若い世代にどうやったら我々の思いが伝わるかということを含めてですね、お話をさせていただければと思ったところでございます。

2. Z世代とは ～現代の医療系大学生の“常識”～

いわゆるZ世代というのがございます。Z世代というと今のだいたい10代から20代のジェネレーションの人たちといろいろ話をすると、私だけではないと思うのですが、皆さん方相当めまいと恐怖に近いものを感じるところがあると思います。

野口英世記念館の会報に書いた一説でございますけれども、私は大学を卒業してずっと教員キャリアということの中で、感染症というのが私にとって一番身近な存在でございました。それで私が感染症というものに関していつごろからどういうきっかけで興味を持ったのかということをお返しして、会報の方に書いたんですけれども、私は子どもの頃からいろいろ病院との付き合いというか、病気をして入院ということが再三ございました。それで急性糸球体腎炎とかジフテリアとかといった病気で入院をしておったところで、何ともなしに親から本を買ってもらって、そして読んだものの中で今でもタイトルはよく覚えてるんですけど、「体のなぜなに」という小学生向けの本でございました。内容は決してレベルは高くはないのですが、そういったことを通じて感染症ということに関して、いろいろ知っていったという経緯がございました。要するに宮入慶之助に関わらず、やはり子ども達というのは何かと書籍を通じて知識を得る、少なくとも皆さん方の年代では普通なことであったわけでありまして。

1970年代に日本人の小学生ですね、どういった伝記を読んできたのかを朝日新聞の資料からあるところ(別の講演会)で紹介したことがございます。そうするとですね、だいたいトップ10というのはもうとにかく断トツで野口英世で、そのほかにエジソン、ヘレンケラー、ベープブレスでございまして、日本の子どもたちはかつては読んで、そして誰の誰さんはこんなことやった人なんだとかそういったことが 小学中学高校とだんだん知識が蓄積するということがあったわけではあります。それが最近では違うということが我々大学で若い学生を指導している中では非常に大きなジレンマであります。数日前に私が講義をしている、私が関係している大学ですけれども、そこの学生に正式にアンケートを取ったわけではないのですが、授業の合間に「現在の千円札の肖像画は誰だ」と聞いたら、

一応野口英世だということはみんな知っております。それではその人についてあなた方は何を知ってるのというようなことで、例えば野口英世の有名なエピソードというのは子どもの頃、農家でしたから囲炉裏に手を突っ込んで左手が火傷で指が開かないようなことになりながら、頑張って医師免許を取り研究者として大成した人なんだということについては誰も知らない。ですからその人が何をやったのかということについて、例えば黄熱病がバクテリアの感染ではないかということを知りたくて死ぬまで疑わなかった人でありましたから、今考えると彼の研究キャリアとしては間違いも多かったということは言えるわけです。そういうところもほとんど学生は知るところにないという状況でありました。ましてやその人が1928年にアフリカのガーナで死んじゃったということも誰も知らない。あるいは千円札は来年から肖像画が変わりますよね。「誰の肖像画が変わるのかということをおあなた方は医療人として知っていますか」ということを聞いても大体1割2割位しか知りません。ましてや北里柴三郎が何をしたのかということは、学部の3年生なのですけれど、ほとんど何も知らないという状況でございました。こういったことが特殊事例かということも考えなければいけないんですけれども、これ実はですね、医学生というのは私が東京で勤務しておりました某国立大学は日本の受験エリートのトップで、偏差値70以上の学生でないと入れないのですけれども、シュヴァイツァーという人がアフリカのガボンという国に診療所を開いて、今でいう国際保健の先駆けのようなことをやった人でありましたけれども、彼のことを知っていると聞いた学生はほとんどいなかったのです。看護学生にもナイチンゲールのことをどれくらい知っているのかということをお私の職場の学生に聞いてもほとんど知らない。ヘレンケラーのことも多分知らないだろうな、キューリー夫人のこともどうなんだろうということで、おそらく今日のご出席の皆さん方にとってはほとんど常識に近いようなことであると思うんです。こういったことが今の若い人は知りません。何で知らないのかということについては、世代の特徴ということで説明されることが多いようです。

1995年から2005年ぐらいまでに生まれた若者はZ世代と言われる世代でございます。特徴は何かというと、子どものころからスマホに慣れ親しんで、スマホがないともう1日2日も生きていけないような世代であります。それで東日本大震災あるいはコロナなどを経験して未来に対して漠然とした不安はありますので、何かと着実に安定を求めて、冒険はしないというようなことも特徴であるということが言われています。

私たちの世代と一番違うというのは、一つにはテレビを見ません。新聞も読みません。ということで彼らにとってのいろんな社会とのつながり、あるいは社会からの知識の取り入れる窓口は何かというと、全てインターネットであります。動画共有サイト、SNS、ネットゲーム、こういったことで世代間の横のつながりということを確認しながら生きているということで、例えば美味しいご飯食べたい、どんなところがいいかなんていうことは彼らはすぐにスマホのInstagramなどで検索をしてここはいいみたいですと探す。それからいろんなわからないことがあるとすぐYouTubeで確認する。時事問題等についてはツイッターで検索をかけるといろんなものが出てきますし、あるいはもうちょっと暇があるなということがあると今の若者は漫画本を読むのではなくてTikTokを目的なしに眺めるということも致します。日本の事例ではないのですけれども、世界の趨勢でアメリカで調査したところが筆記体の英文を読めないアメリカ人の若者が多くなっている。全てインターネットで出てくる英文は、筆記体ではありませんので、それではないような表現についてはなかなかわからなくなりつつあるということがあります。こういったことがどういった彼らの若者像になっているかということ一つには多様性を尊重する一方で自分らしさ、自分ということをお認めてもらいたいということでもあります。ですから、先人の偉いことをやった人がいる、それはそれで結構だ、ただし自分は自分の生き方をするとということになると、なかなか過去に宮入慶之助先生がこんな偉いことをやったんだというようなことを伝えるということにもなるわけです。

大学で授業をしておりますけれども、講義ということで学校の先生が私の話を聞きなさい、教科書の本を読みなさいというような形の学習はとても苦手であります。その一方で自分が興味を持ってそれを学んでいくということについては、比較的興味を示してくれる。さきほど申し上げましたけれども、動画を好みます。動画でもってこういったことをやるにはこうしたらいいんだということを主張する、だいたい1日平均70本くらいのYouTubeを見るというのが一番多いそうです。とにかく日常生活の基盤には彼らにとっては、YouTube、TikTokがあります。とにかく自分らしくありたいとか自分にしかできないことを実現したい、しかもまた人間は多様であり、平等であるということでお自分の利益にならないということに対しては否定的に対応するということがございます。ですから先ほど申し上げた通

り、過去にこんなすごい人がこんな業績を残したということに接して、これを自分の人生の指針にするということに関してはきわめて関心が希薄であります。こういったZ世代と言われる若い人たちがこれからの日本を担っていくということになるわけです。

そういったことで、今日は宮入記念館でございますので宮入慶之助先生など先人の偉業をどうやって伝えるのか、伝えることについては十分な価値があると確信しておりますので、そこのところを当面、実は大変難しく由々しく、そして本当に時々絶望に近いような感じがするわけであります。絶望しておりますても何も生まれませんのでこちらの会員の皆様方もどうやってこれを突破していこうかと考えるわけです。

3. 明治以降の医学者の顕彰施設(大学附置を除く)

宮入記念館のみならず、明治以降の医学者、医学研究者、あるいはいろいろな意味で医学に貢献のあった方の顕彰施設、野口英世記念館とか北里柴三郎記念館などというのは一番有名なものの一つかなと思うんですけども、ほかにもいろいろございます。それぞれに設置母体、運営形態などがございまして、色々情報を見てまいりますとやはり野口英世記念館が年間だいたい昨年度ベースで13万人弱でございますけれども、10年くらい前までは年間20万人ぐらいの来館者ということでしたが、少なくなったということで野口英世記念館でも危惧しております。福島県の吉田富三記念館は、年間1万人位の入館者というのはたいしたものだなというのは感じました。

吉岡弥生記念館の吉岡弥生という人は、東京女子医大の創設者でありますから、非常にニッチな記念館であります。それからあと藤野巖九郎記念館というのは、これは魯迅の小説にございます藤野先生という解剖の先生でありますけれども、お育ちになった福井県のあわら市の方にあたりとか色々あるもんだなと思いました。それぞれの記念館がどういった活動をしているのかを見ていくと、例えば北里柴三郎記念館というのがございます。北里柴三郎という人は熊本県の小国町のご出身で、東京帝国大学を卒業、ペスト菌を発見されたりとかあるいはドイツのロベルト・コッホのところへ留学致しまして、破傷風の血清療法を開発したということで、その頃一緒に研究していたベーリングという男と一緒にやっていたんですけども、残念ながらノーベル賞はベーリングがとって、北里は受賞には至らなかったんです。北里は日本に帰ってきて伝染病研究所、東大の医科研の前身でありますけど、あるいは慶応大学医学部の創設といった功績がありました。北里学園が北里柴三郎という名前を冠した学校でございまして、この記念館を整備して、熊本県の出生地の小国町に寄贈して、そして現在北里柴三郎記念館という形で運営されています。彼の生育時代環境、北里の生活信条云々ということを表示しているということでございます。館のモットーとしては、「小国の風土と心が育てた郷土のスター、日本が誇る世界的な細菌学者北里柴三郎博士の世界へ」というようなことが大きな看板になっております。今はネットの時代でありますから必ず口コミということがありますけれど、ネットに出ている口コミを見て、若い人は僕も私も行ってみようということになるわけがあります。とにかく感銘を受けたので是非一度訪れた方がいいですよなんてことがあるとじゃあ行こうかという話になるというわけであります。ただ北里記念館というのは熊本でも一番鄙のところにございまして、年間だいたい5000人から6000人の来館者ということを知っておりますけれども、あのような交通が不便なところであってやっております。

意外と社会の知名度に対しては健闘しているなあということで、吉田富三記念館なんていうのは結構頑張っているなあということで、紹介してみようかと思っております。この方は文化勲章を受章されたので、それなりに医学の世界では有名な方です。実験的な腫瘍を作り出す吉田サルコーマという肉腫がございまして、我々も教科書では勉強する先生なんですけれども、ご出身地の福島県浅川町、これも交通のかなり不便なところでもあります。そこに吉田富三顕彰会という団体があって、その法人が設置して浅川町の町長さんも理事になっております。口コミをちょっと拝見すると、「国道沿いに走っていたらなんかあったんで気まぐれにちょっと訪問してみたけど、記念館でした」とか、あるいは「よそ者には全然興味引かないものもあったんですけども、内容は充実してるなってことが分かりました」とか、「水郡線という水戸と郡山を結ぶ非常にローカル線が走っているんですけども、そこところの途中にあるところで観光地でも何でもなし、ここだけを目指して来るという人はあんまりいないんだろうけれども、どうしてもあの辺にある観光に行くという人はついでに寄られたらいいんじゃないですか」なんていう口コミもあ

りました。

4, 野口英世記念館・感染症ミュージアム

日本で一番医学研究者の記念館の代表的なものは、野口英世記念館だと思います。野口が生まれました福島県の猪苗代というところにごさいますけれども、なかなか立派な外観でごさいます。野口英世の生家があって、その囲炉裏で手を火傷して、その後の大変な人生の苦労を背負ったわけであります。その柱のところに行く、志を達成しなければ自分は二度とここに帰ってこないなんてことまで小刀で削ったようなものも残っていたりする。これは来館者が見て野口という人は苦労して努力して頑張ったんだと思いを新たにすることであります。また野口記念館としてもこれを若者にどうやって伝えるかということについては、前の理事長さんが非常に大胆なりフォームを致しまして、アメリカンコミックの劇画タッチにした演出で、「なかなかちょっと見て結構面白いよ」なんて口コミも入ってくるような状況になっております。一番有名なものということでありますけれど、これは当然といえば当然でありますけど、公益財団法人で予算規模も基本財産が何十億という形で運営している団体です。歴史も戦前からずっとある記念館ということでもなかなか規模の大きなものということでごさいます。ただそれでもですね、年年歳歳、来館者が減ってきているということがごさいます。それでなんとかしなくてはいけないということで、そのうちのひとつが感染症ミュージアムを昨年創設して、中学生・高校生にもっともっと見に来てもらおうという活動を継続しておられる。当面の課題というのが、入館者がじり貧になってきている、コロナということもごさいましたが、だんだん減ってきている。これを何とかしようと、野口英世記念館の来館者が年間15万人とか20万人というその主体は修学旅行でありました。また展示内容を若い人にアピールするようなものにしていかなければこれはもう小学校、中学校の修学旅行として魅力がどんどんなくなるということで、更新多様化ということに努めている。また全国の他施設との共同事業を是非展開したいということで、実は前の記念館の理事長をしておられた先生から、お前も宮入慶之助記念館の方にも関係しているなら、なにか色々一緒に事業できたらいいねと言っておられました。安定的な財務状況の野口記念館位になりますと、大体1億、2億の寄付をしてくださる方がいらっしゃいます。そういったところに頼って、なんとか今のレベルの活動を継続していくということであります。ただ公益財団法人ということでようやく2年前ぐらいですかね、寄付いただいた場合は所得控除ではなくて税額控除にしたということもあって、寄付金をいただくということについてのひとつの大きなハードルがなくなって良かったなどと理事会では議論しております。

それから若者に対しての情報発信ということで、インスタグラムで情報発信しておりますけれども、残念ながらフォロワーが今のところ140件といったところで、あまり多くはないんですけども、野口記念館に行った方がインスタグラムに投稿して、それを見て私も行こうかということがごさいます。来館者ということでも17万人、20万人ということを目ざすずっとやっておりましたけれど、コロナで9万人といった数字になって、そしてまたようやくコロナからの回復ということで入館者増を目指していくことにしておりますけれども、なかなかやっぱりいろんな意味でじり貧ということは野口英世記念館でさえうまくいっている状況ではありません。啓発事業として、先ほど宮入記念館の事業報告でも伺いましたけれど、やっぱり地元小学生にいかにアピールするかということを一生涯懸念やろうとしているということ、それから県内高校生対象にこれはもう基本財産がごさいますから、奨学金、しかもこれは今は給付型の奨学金ということで、給付していることがごさいます。それから町内の地元の小学生対象の科学賞ということで、野口英世に負けないような科学者に育てて欲しいということをお願いしようとしていることがごさいます。あとは出前授業というのは非常に大きな柱でごさいます、これは専従の職員がおりますし、あとは自由に動ける理事もおりますので、小中学校はだいたい昨年度は県内外、近隣県も含めまして200ぐらいの小中学校に行って、出前授業をしているというような状況がごさいます。感染症ミュージアムも若い人たちに対するアピールのひとつの手段としております。そういった事業ということに関して、子どもたちがどう受け取っているのかということがごさいます。作文コンクールがごさいます、その特選という作品を見てみると、野口英世記念館を見学した時に非常に大きな感銘を受けたということで作文を作ってくる、この場合は野口英世の生家の柱のきずが題材であります。「志を得ざれば再びこの地を踏まず」というのを学校の先生からこういった意味だよと教えてもらって、やっぱりこ

れはすごいことなんだと感銘を受けて、自分も見習いたいということを書いてくれた作文でありました。これは小学校の4年生ですね。

それから感染症ミュージアム、昨年の7月に「感染症の過去と現在と未来をつなぐ」といったコンセプトで、主に高校生位の若い人たちに日本の感染症研究の歴史、それから感染症の発展に寄与した日本人の研究者のやったことを知ってもらおうということで開館したものであります。

感染症は克服できるんだということ、そのために一人一人が取るべき行動とは何だったのか、その中であなたの方の先輩がこんなことをしてきたということが今日につながっているのだということを伝えるという役割はあります。宮入慶之助を展示の中に含めていただきました。だいたい半年で2万人位の方に来ていただいています。展示室には寄生虫関係のコーナーで、マラリア、住血吸虫など、宮入博士の写真も含めてですね、日本の研究者宮入それから桂田、藤浪こういった先人が大きな貢献をして世界の住血吸虫の克服に大きな先鞭をつけたんだということを文章と写真、そういった視覚を含めて展示しているところでもあります。

5. 宮入慶之助をどの様に伝えるか？

今見てきたような記念館というのは、規模としても私どもの宮入記念館のような小規模NPO法人の参考になることはあるのかなのか、その辺はしんどいところがございます。今こういった会員の皆様方が宮入慶之助記念館を大きな努力で充実に向けて活動いただいているところで、それをどのようにそのまま外に発信していくのかということについては、これから私も含めて皆様方といろいろと考えていかなければいけない、どうしたらいいんだろうっておそらく皆さんそれぞれにお考えがあるかと思うのですけれども、妙案はございません。やはり一番大きなネックはやっぱり今の若者はZ世代でございますので、なかなか難しゅうございます。他の記念館の事例を見て回りますと先ほどちょっと紹介いたしました吉田富三記念館であるとかあるいは藤野記念館といった事例は、地域をあげてバックアップしているということがございます。長野市という大きな自治体ではなくて、吉田記念館の場合は福島県の浅川町、藤野記念館の場合は福井県のあわら市ということで、それぞれの自治体のネットで検索すると、全てこういったものがやはり観光に是非訪れてくださいということに出てまいります。そういった意味で行政によるバックアップが非常に強力になされています。

それでZ世代の若者を標的とした情報発信をどうしたらいいのかということで一番大きな問題は彼らは活字を読みませんので、活字で訴えるということについては若者に対してきわめて効果は限定的であります。今はもうインスタグラムの時代だと聞かされましたけれど、これがまた数年後にインスタグラムに変わるいろんなソーシャルメディアのツールが大きくなるのかもしれないのです。そのところの発信ということを我々もいろんな工夫、それから努力をしていく必要があろうかということと、一般市民対象の継続的な情報発信ということで、もうすでに宮入記念館でもいろんな企画、それから近隣の篠ノ井東小学校での読み聞かせというようなことをやっておりますので、状況が許す限りは拡大していく必要があろうかと思えます。やはり人数に限られておりますので、如何にこの会員の方々の連携ということで、やっていくのかということが非常に大きな課題であることは言わずもがなであります。あるいは他の記念館との共同事業ということで、これはすでに2013年のミヤイリガイ発見100周年の時は、国立科学博物館と目黒寄生虫館、それからこちらと日本寄生虫学会を含めましてですね、割に大きな連携の事業として大きな成果を収めたと思っております。その時のご縁でミヤイリガイストラップというのも目黒寄生虫館が作ろうなんていうことで作ったということもございます。先ほど申し上げた通り、野口英世記念館としても宮入慶之助と野口英世というのはアメリカのロックフェラー研究所に行ったときに接点があったわけですから何かできるといいねという話はしておりました。実際やるとなると非常にエネルギー使うことですので、色々大変だとは思うのですけれども、これは私どものようなアカデミア関係の会員ということも含めて何かこういったことも実現を目指して努力できたらいいなということは思っております。

宮入慶之助記念館の難しいところは何かと言うと、実は宮入慶之助の功績というのは、ローカルではなく、グローバルなですね。世界でも何億人という感染者がいる住血吸虫という寄生虫病の対策の道筋を開いたというのは確実に宮入慶之助博士なんですけれども、その果たした功績というのは残念ながら長野という地元にとどれだ

Table 10.1. Landmarks in schistosomiasis japonica

1847	Fujii described the clinical syndrome of Katayama disease
1888	Majima found ova now known to be those of <i>S. japonicum</i> in human liver and described the pathological appearances
1903	Kawanishi found eggs in human faeces
1904	Kawanishi described hatching of miracidia from eggs Katsurada found male adult worms in the portal vein of a cat (April), then later found male and female worms in another cat, and described the pathological changes in the bowel Fujinami found a female worm in the portal vein of a human (May) Tsuchiya found adult worms in cats, dogs and humans Catto found adult worms in the mesenteric veins of a human and described the pathological appearances
1909	Fujinami and Nakamura showed by experiments with cows that infection was acquired by organisms penetrating the skin
1912	Miyagawa demonstrated schistosomula in histological sections of skin and in blood and lymph
1913	Miyairi and Suzuki described infection of <i>Oncomelania</i> snails with miracidia and the development of miracidia through sporocyst stages to cercariae, then recovered adult worms from mice exposed to cercariae obtained from naturally infected snails
1919	Fujinami controlled the molluscan vectors with lime
1921	Sanders and Priston indicated that tartar emetic may be of some value in treatment
1971	Nitidazole was shown to be of value in therapy by Santos and colleagues
1977	Praziquantel was reported to be effective in experimental animals
1979	Praziquantel was shown to be highly effective in humans by Santos and colleagues

感染症研究史の中の 宮入慶之助

“日本では住血吸虫成虫の発見後、わずか9年で宮入と鈴木によって感染経路が明らかになった。これはアフリカの住血吸虫で解明するのに64年を要したことは大きな対比であり、その発見は宮入ら日本の研究成果を参考にしたものであった。”

D. Grove, A History of Human Helminthology, CABI, Oxon, UK, 1990 より

けアピールできるかということについては、なかなか厳しいかなと私も正直考えるところであり、世界的な感染症研究書をひっくり返しても必ずこれは宮入慶之助という名前が出てまいります。例えばこの本もこれ私の恩師から頂いたものでありますけれども、日本では住血吸虫の虫を発見した後わずか9年で宮入と鈴木によって感染経路、

即ち貝から感染するということが明らかになっている。これはアフリカで住血吸虫という虫が見つかったのは日本の住血吸虫発見より4、50年前だったのですけれども、これがやっぱり貝から感染してくるってことこの事実が分かるまでに60年以上経過している。それに比べると日本ではたった9年でやった。アフリカでこういった住血吸虫の感染を媒介する貝を発見するということに関しては、その研究に当たった連中はみんな宮入らの研究成果を参考にしているんだということが感染症研究書の教科書にきちんと書いてあります。別の本にもこれも有名な感染症の歴史の教科書ですけど、これなんか面白いですね、「慶之助宮入は侍の息子で」というようなことまで書いてあります。

宮入慶之助記念館の功績、やった成果、業績はグローバル、ただローカルに如何にこれをアピールするかということの難しさが一番大きなネックになっているような気はしております。それでは似たような事例はほかに無いということで、隣の上田の市立博物館に山極勝三郎記念室というのがあります。この方は東大の病理学の先生をやっておられた方で、ウサギの耳にコールタールを何年も塗りつけていたら、そこに悪性腫瘍ができたということで、実験的な悪性腫瘍を作るということで、山極勝三郎という先生は非常に世界的にも有名な方であり、1925年、26年、28年、36年と4回にわたってノーベル賞の候補としてノミネートされているんですけど、ノーベル賞というのはもともとこれはヨーロッパの研究者に出すというのが暗黙の前提でありましたので、宮入先生も含めて山極勝三郎先生もノーベル賞の授与に浴することはなかったということでもあります。年齢を見てお分かりの通り、これはもう宮入慶之助とほぼ同年代の人であります。この実験的な腫瘍を作ることというのは上田市に取り立てて何の貢献もないんでしょうけれども、やった成果はグローバルであります。ただローカルにアピールすることについてはなかなか理解も難しいところなのでしょうということで、宮入慶之助とは立ち位置的には似てるかなというような気は致しておりました。これは博物館の1階に山極勝三郎記念室というのがあり、「真田丸」というNHKの大河ドラマの影響もあって多い年はだいたい30万人ぐらいの来館者があったということでもあります。確実にこれぐらいの方々の目に触れるということはなされてはいるということです。山極勝三郎先生については業績の継承ということでは、こうした方法をとっているということです。

もう一度宮入慶之助という人に立ち返ってみると、宮入先生の功績の恩恵は誰が受けたかということこれはもう日本住血吸虫病が流行していたところの住民であります。この近くで言うと山梨県ということになります。幸か不幸か信州では日本住血吸虫病という病気はもう一切ありませんでしたので、宮入先生がおやりになったことの恩恵というのは、長野県では残念ながらゼロであったということでもあります。しかしながら世界のグローバルな貢献をなされた地元の出身の方々をやっぱり誇りにするというのは、郷土の誇りということではやはりアピールするところでもあります。そういった点では、先ほどの藤野記念館であるとか吉田記念館とかそういったところとこれは設置の

コンセプトとしては似ているというところはございますので、それは如何に上手にミックスしてアピールしていくのかということになります。ただ藤野記念館については東北大学が、吉田記念館については東大が非常に大きなバックアップをしておりますので、やはりこれも宮入記念館でも多田先生が理事をお勤めいただいた頃は、九大とタイアップということもありましたので、そこは何とか発展していったグローバルな功績をローカルな皆さんにアピールするということができるといいなという気はしております。

昨日も3名の方が来館されたと、その3名の方はいずれも山梨県の甲府のちょっと南に昭和町というのがありますけれども、その風土伝承館杉浦醫院というところをお訪ねになって、宮入記念館のことも知ったので今回おいでになったという経緯を伺いました。この杉浦醫院も5年、10年ぐらい前ですかね、これは杉浦醫院としてご一族の方がお住まいになっていたところを山梨県の昭和町が買い取って風土伝承館というものの中の杉浦醫院という形でこれを公開されているというところでもあります。なかなかの来館者がございます、去年は1万3000人が杉浦醫院を訪ねた人がいるという話であります。やはりこれは昭和町がシャトルバスを運行して観光バス等も含めて誘致にまず動いているということがホームページから見て取れるわけであります。日本住血吸虫症の研究、治療に生涯をかけた医師杉浦健造・三郎父子の業績を検証し、終息に至る先人の足跡を伝承していくために昭和町としては記念館を設置したんだというようなことが述べられています。昭和町というのは人口密度が結構高いのですけれども、小さな自治体ですからこういったことで非常に大きなバックアップをされているんだと思うんです。バスも運行したりして、口コミにも是非この地を訪れて杉浦記念館を見てきたらいいですよということが言われています。なぜミヤイリガイが発見されるまで時間がかかったのかとかそういったことはここに行って色々展示を見ていただくと納得できるようになるということも書いてあるということです。そういったこともあってミヤイリガイのご縁で宮入記念館の方についてもいろいろご説明いただいているんだということがちょっと先ほど理事長とお話をしてよくわかりました。

6. まとめ

そんなことでどうやって若い人たちに宮入慶之助の業績を伝えていくのかということは、これをはなから私に答えがあることでもないことはもうこれは確信犯でございます。私どもの立場としても宮入慶之助の果たした大きな仕事というのは、是非若い人に、次の世代に知ってってもらいたいという気持ちは皆さん方と同じだと思います。とにかく我々が偉人伝ということで本を読んで仕入れたような知識というのは、もう今の若い人たちには伝えていくことはほとんど不可能だと思います。ということで若い人がどういった情報を受け取っていくのか、受け取るツールとして何を使っているのか、あるいは彼らがどういった人生観、価値観を持っているのかということをもう一度考え直して、そして彼らの価値観にある意味ちょっと表現はもう情けないのですけれど、迎合するというようなことをやりながらアピールしていくということが当然必要になってきます。そして他施設の例にならえば、若い人たちに記念館の業績としてかつての研究者の方の業績を検証していくということには野口英世記念館でさえ町内の小学生中学生へ非常にローカルな活動を通して、ようやく伝承が伝えられるようなことが確保されているということは、非常に大きなメッセージになるかと思いました。長野市ということでインターネットで市内の博物館を検索しても宮入慶之助記念館というのはほとんど出てこないんですね。先ほど何うと八十二銀行の文化財団とかとそういったところともいろいろとタイアップが出来てきつつあるということなので、これがもうちょっといろんな方の目に触れることがあるといいなと思いますし、他施設の杉浦醫院との連携もうまくいっているということも伺いましたので、私も安心いたしました。宮入慶之助単独ではなくて、関連する輪のつながりを意識した我々のこの記念館の活動展開ということも重要なのかと感じました。SNS発信の一層の充実ということがまとめられると思います。先ほど口コミということをつくつかの記念館について提示させていただきましたが、残念ながら私の調べる限りでは宮入慶之助記念館を訪ねたという口コミはインターネットでは一つも見つからないのです。若い世代に如何に宮入慶之助のやったことはすごいことですから、業績を何とか伝えるということをもも考えていきますし、会員の皆様方も折に触れてお考えを色々お聞かせいただければありがたいと思っております。

(2023年6月25日 宮入慶之助記念館通常総会後の卓話会にて)

「あすならう」の碑を建てる

この「あすならう碑」は宮入慶之助生家(現長野市松代町西寺尾)の一角に建っていたものですが、数年前に記念館に移し、保管しておりました。あすなろの樹は既になかったようです。今般6月29日に建碑工事を開始し、7月10日に工事が完了いたしました。石碑は、正面幅21cm、奥行17cm、長さ154cm、下から43cmのところまで茶褐色を呈しており、ここまで土に埋まっていたことがわかります。

石碑表面には「宮入慶之助博士植付(十六才) あすならう」、左側面には「昭和十一年三月 門人内田孝蔵建」と刻まれています。宮入慶之助は、明治13年(1880)12月に東京大学医学部医学予科五等乙(第一年)に入学します。この入学した明治13年は数え年で16歳になります。明治期には数え年で年齢を数えるのが通常であったことを考えると、数え年16歳、明治13年12月にあすなろの苗木を持ち帰り、実家の庭に植えたということになります。大学進学目標を達成し、さらに飛躍を祈念してあすなろの樹を植えたと推察されます。



宮入家では、慶之助が上京して東京大学に無事に進学、その記念にあすなろの樹を植え、4歳年上の兄謨七郎が大事に育てていたものと思われます。その後、56年後の昭和11年3月に門人内田孝蔵によって、石碑が建てられたということです。石碑の文字も内田孝蔵が書いたものと推察されます。

内田孝蔵(1881~1952)は、明治14年(1881)9月27日、高遠藩内田文臈の三男として生まれ、第一高等学校を経て、大正元年(1912)九州帝国大学医科(眼科教室)を卒業します。大正12年(1923)8月より新築の丸ビル4階に丸ビル眼科を創設して、「一重マブタを二重マブタにする法」の研究実践、斜視手術整形一般、トラホーム、眼神経衰弱などの治療に取り組み、名物医傑とされていました。大正3年(1914)には関東在住の九州帝国大学医科出身者の親睦の会「抜天

会」が創立されます。「抜天会」とは、九州地方の方言「バッテン」を模して名付けられたものです。その「抜天会」の育ての親とされるのが内田孝蔵でした。宮入慶之助は九州帝国大学を退官後、東京市北豊島郡上練馬村字向山(現東京都板橋区)に居住しており、慶之助も「抜天会」に入り、交流を重ねていたと思われます。慶之助と内田とは16歳の年の差がありますが、ともに信濃出身ということで、特に親交を深めていたのではないかと思います。慶之助が明治13年に生家にあすなろの樹を植えたことを内田が聞くに及び、自分の生まれた年とほぼ同じ年であったことも重なって、あすなろの石碑を建てることを進言し、内田が文字を記し、建てたものと思われます。一つの石碑から、慶之助をめぐる様々なドラマが浮かび上がってきます。

宮入慶之助記念館だより 第33号

発行者 特定非営利活動法人

宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&Fax 026 (293) 4028

HP: 《宮入慶之助記念館》で検索

発行日 2023年(令和5年)8月4日